ヨシの髄から覗いたソ連（上）

―シベリア捕虜回想記―

宮川政治

一、満州よりシベリアへ

昭和二十年八月八日深夜、ソ連軍は連合国の要請に基づき戦争終結を促進するという理由で、突如、対日宣戦を布告、東北西の三方面より一斉に満洲に侵入して来た。

すでに強力な主力部隊の全てを南方戦線に転用され、弱体化した関東軍は、その穴埋めに現地人を恨こそぎ動員して編成された新設師団ばかりであった。予め用意されていた計画に従い、軍司令部は人員を約三分の一に縮小して、陣地構築された通化に撤退し、長期持久戦の態勢に移行することになった。関東軍軍医部員であった私は、八月十一日に奉天の策三軍軍医部に転属となったが、その四日後に終戦を迎えるとは夢にも思っていなかった。

八月十五日、終戦の詔勅を聞き、軍司令官以下、最早覚悟を決めたのであったが、二十日過ぎソ連は奉天まで南下、我々は無抵抗で降伏を余儀無く受け入れ、ソ連軍の指示に従うことにたった。奉天の日本軍は北陵に集結させられて、全ての兵器を放棄し、更に新京の南嶺に移された。十月上旬「ダモイ（「家へ」の意味から帰国のこと）だ」と言われ、約千五百人の混成大隊が編成され、貨車に二段収容で分乗、次々と輸送されることになった。よもや、これが長い抑留捕虜生活への始めになろうとは、当時の我々は誰一人予側していなかった。

我々の貨車が朝の太陽を右後方に受けて進んでいるのに気がつき、ダモイだと思っていた兵隊達が騒ぎ出した。ロシア語の出来る者が問い質したが、ソ連側は南方には八路軍がいて通れないので北回りでウラジオストックへ出ると言う。しかし、貨車は更に北西へ進みシベリアに入って行った。

こうして在満六十万人以上と推定される軍人軍属達は、強制労働力の資源としてシベリアを主としたソ連領各地に捕虜として連行された。また、これと併行して在満の莫大な資料、食糧等も根こそぎ略奪されていったのである。

二、林の中の丸太小屋

マンドリン（肩から掛けた格好から我々が通称していた自動小銃）を持ったソ連兵に厳重に監視されながら、通常なら二日行程位の距離を十数日もかかる緩慢な輸送の後、チタ市から北東約百キロのカラ松林の丘陵地に着いたのは十一月上旬であった。着いた当座は零下十数度位であったろうか、しかし、そこは厳冬時には零下三十度を下回るような極寒の地であった。

小さな丸太小屋が一つあるだけのこの丘で、私たちの生活は露営から始まった。六キロ位離れたシヤバルトイという小部落から来るソ連人の木こり連中の指導を受けて松を伐採し丸太を作り、それで自分達の住む小屋を造るのである。丸太の両面をタポール（斧）で少し平面に削り、切り込みのクサビを入れ、苔を間に積み重ねて側壁とし、屋根も丸太で傾斜をつけて並べ、その上には苔と松葉に枝を敷き詰め、砂をのせた簡素なものである。なんとか一ヵ月余りで、数個の大きな丸太小屋か出来上った。

水は低地にある沼の氷結面に直径三十センチ位の穴を開け、綱をつけたバケツでドラム缶に汲み上げて木橇運ぶ。

丸太小屋は二段収容の形態であった。床板は素性のよい丸太をタポールとクサビで引き割って作るが、木の繊維なりに自然と少し波を打ち、ゴリゴリしたものであった。その上に松葉を敷いて毛布をのせるというなんとも心許無い酷いもので、それに着の身着のまま、外套を被って寝るのであった。

こんな丸太小屋の生活も、厳冬の間二、三ヵ月も経つと次第に板についてきた。やがて最果ての地で本格的な伐採の強制労働が始まったのである。

三、収容所の構造と便所

広大なシベリアなので、収容所の敷地も広々としていたが、周囲はニメートル位の間隔で支柱が立ち、有刺鉄線が高さニメートル位まで二重に張り巡らされ、四隅には望楼が設置されていた。大抵の場合、対角線上の二ヵ所にマンドリンを持った監視兵が四六時中見張っていた。それらの施設のほとんどすべてが捕虜自身が造ったものであるから、自分で造った籠に入っている籠の鳥の様で、何とも複雑な思いがした。

収容所の四辺のうちの一ヵ所だけ出入口があり、脇に警備兵の詰所があった。作業隊はその手前で五列縦隊になり点呼を受けてから、一隊にマンドリンを持った一名のカンボイ（監視兵）がついて現場へ向う。

作業員は各々黒パン二五〇ｇを昼食用に支給されたが、皆朝食と一緒に食べてしまうのが常であった。要するに、先のことはどうでもよいので、一時的にでも多少の満腹感を味いたいという思いからであった。

数棟建っている丸太小屋の宿舎から遠く離れて、収容所の片隅（出入口の反対の一番奥）に露天便所があった。これは二メートル位の間隔で、縦三メートル、幅一メートル、深さ一・五メートル位の矩形の穴を七、八列に掘ったもので、松の割板が縦に二枚ずつ渡してあった。その板の上を渡ってしゃがみ、尻を出して用をたすのであるが、朝の混雑時には一つの穴に二、三人ずつ二十人位が串ダンゴのように並ぶ。拭く紙が無いと、木の切れはしでこき落すわけで、誠に哀れな姿であった。

夏はそれでもまだよいが、真冬になると大変で、尻を出している時間が長いと身体中が冷え込んでしまう。そのうえ食べ物が片寄っていて、高粱だけとか、数の子たけとかにたると、そのままの便が出て下痢となり、それだけ用便が長く頻回になり、冷え込みは一層酷かった。足元の穴には円錐形に凍結した糞塊の尖った柱が上に幾重にも出来て、尻につきそうになるので、時にはバールで打ち砕いて氷の糞山を崩さなければならなかった。半年以上も経つと満杯になり、周りの上砂で埋めたが、その前に別の所に同様の穴を自分達で掘らなければならなかったのは勿論である。

四、なんでも作る兵隊さん

昔の軍隊にはあらゆる階層、色々な職業の人達が集まっていた。多方面の技能者がいて、また器用な人も多かった。

最初に入所した収容所は山林の伐採場の中にあったので、木はいくらでもあった。しかし、道具らしい道具は無かった筈が、兵隊達はどこから手に入れたのか、隠し持っていたのか、あるいは作ったのか分からないが、何時の間にか小鋸、カノナ、ノミ、バリカン、髭剃り等が揃い、各々鍛冶屋、大工、床屋、風呂屋等の仕事を分業するようになってきた。そして、暫くする間に物指、箸、匙は勿論、桶、樽、柄杓、腰掛、机、大八車等々生活に必要な物は殆どなんでも作ってしまった。驚いたことには、殻のついたまま与えられる麦、粟、稗、あるいは高粱等の脱穀のための碾き臼や、殻を吹きとばす手回し送風器まで作ってしまった。

やがて暇がなんとか取れる頃になると、将棋や麻雀牌まで出来ており、一寸した娯楽すら出来るようになった。

五、ロシア語、掛け算

千五百人程の我々の仲間の中には、二人程ロシア語の少し出来る者（あとで密かに分かったのだが、一人は特務機関の関係者であった）が居て、ソ連側と交渉するためにペリオチク（通訳）の役割をするようになった。我々も生命に係わる場合があるので、ロシア語の日常会話を一生懸命に勉強した。数ヵ月も経つと、身ぶり、手ぶりを交えて、なんとか日常の挨拶や簡単な意思の疎通を図ることが出来るようになった。

当時ソ連の将校とは言っても、連中の算

数の弱いのには驚いた。掛け算は全く駄目。朝夕の点呼の時にも、五列縦隊にして横を歩きながら五、十、十五と数えて五十になると紙に書き、例えば決して５×１３等の計算をしなかったし、出来もしなかった。

六、黒パン・スープの定義

主食の黒パンは、燕麦と玉蜀黍の粉を主にしたものに、「ドロジー」という発酵物を混ぜて一晩置いたものを練り直し、約八×一〇×二〇センチ大の黒褐色の煉瓦状に焼き上げたものである。酸っぱい味で、ボソボソして、今の日本ではとても食べられた代物ではないが、当時はそれが生命の糧であり、かなり美味しく感じられた。

副食には、塩、油、キャベツまたは馬鈴薯に、肉あるいは魚が少々入った水気の多いスープを作った。なにも特に考えることがあるわけでもないので、いつか補虜仲間でスープの定義について話し合ったことがある。色々な意見が出たが、結局は、「味のついた液体で、なにか食べられるものが入っているもの」という、非常に当り前の結論に落ち着いた。中に入れる具がもっと多種にわたっていれば、もう少しまともな定養になっていたろうに。いまの若い人のスープの定義というのは、きっともっと異なったものであろう。

七、栄養失調・発疹チフス

当時はソ連も激烈な独ソ戦が終了した直後で、国全体が非常に困窮疲弊していたのは確かである。従って、シベリア地方の住民の食物や被服、特に日常品の程度は誠に酷いものであった。軍人、地方人共に我々の鉛筆（カランダーシ）、時計（チヤスイ）等、あらゆる物を欲しがり、奪っていった。

チタ市方面からほぼ一週毎に我々捕虜に輸送される食糧も非常に粗末で、且つ量も少なく、時により種類の上でも片寄っていることが多かった。更に、それを収容所長以下のソ連軍人が横流しするらしく、それに従い主食と副食は質量共に劣悪の一途を辿った。その中でも殊に困ったのは、今でこそ高級品でおる数の子ばかりが、十日以上も続いた時のことである。数の子は煮ても焼いても食えないもので、塩水に浸して食べるより方法が無く、下痢患者ばかりが多発したが、食物を控えろという訳にもいかず、なんとも手の打ちようがなかった。

当然、我々の間に栄養失調状態の者が日に日にふえてきた。微力ながらドクトルの立場で、再三再四ソ連側に粘り強く交渉して、不允分ながらも、なんとか生命維持が出来る程度に、次第に改善することが出来たが、さりとて満足のいく状態でなかったことは周知のことである。

被服は、何分にも着たきり雀で、始めの数カ月は入浴も出来ないため衣虱が多発した。出来ることと言えば、たまに桶一杯の湯で身を洗う程度であった。最も恐ろしい発疹千フスが発生したら、栄養失調の状態では一たまりもないので、これまたソ連側に強硬に交渉して作業を暫時休んで、デスカメロン(熱気殺虫装置)を作り、なんとか防止することが出来たのは幸いであった。

八、お尻の皮をひとひねり

「働かざる者食うべからず」「分配は労働の質と量に応じて」等、共産主義表現は色々あるが、我々捕虜は強制労働の資源であることには間違いなかったので、色々な労働に作業時間とノルマが定められていた。また、ソ連の作業係将校にもノルマがあり、伐採の作業人員を少しでも多く出して、ノルマを消化したいのである。労働者の作業能力は、病人を除いて四段階に分けられ、ペルビー（一級）、フタロイ（二級）、トレーチ（三級）、オーカー（ＯＫ）となっており、一～二級は外の作業、三級は軽作業、ＯＫは営内の軽作業に当てられた。

我々の作業能力を識別するため、ソ連のドクトルあるいはフエルシエル（補助医師

資格者）が、月に一回定期的に身体検査を行った。日本の軍医がこれに立ち合うのであるが、聴診器その他、何の必頭もない。全員素裸、全くの一糸まとわぬ丸裸で一列に並び、ドクトルの前に立つ。彼は顔から体表を一瞥し、回れ右させて、ただ単にお尻の皮をひとひねりするだけなのである。

このひとひねりが秘訣であって、直ちにペルビー、フタロイ、トレーチ、オーカーと判定する。なんのことはない、馬の尻の肉の落ち具合で軍馬の判定をするようなもので、確かに皮下脂肪と肉の落ち具合で或る程度の栄養状態の判定にはなるが、これで全てを決められてはたまったものではない。前述のような食物の不良、不足、片寄り等で、麻痺性脚気症状の者もいたが、どんなに説明しても理解してもらえなかった。

このような労働等級の決め方は、その後色々な収容所へ回されても同様であった。栄養失調状態の時は尻の皮がダブダブになり、指でつまむと皮だけが薄く掴めるのは確かで、時折、自分の尻をひねってみるたび、ただただ情なくなったものであった。

九、零下四十度Cの寒さ

我々のいたシベリア東部は、日本の様な四季が無く、春、夏、秋が一度に来て、その間に草木も成長し、野花も一斉に我先にと弾けるように咲いた。農作物としては馬鈴薯、キャベツ、玉蜀黍、麦類が主で、収獲期は五月下旬から六、七、八月と九月上旬の僅か三ヵ月余りである。夏は一時的であるが、たまに日光下では汗ばむこともあり、身も心も多少は軽くなった。緯度が高いため所謂白夜の状態で、朝は四時前から夜は十一時過ぎまで明るい。上地は荒涼とした砂地で、エブ松、カラ松の松林が果てしなく続いている。九月後半からは足早に日が短くなり、木枯しが吹いては、その度に長い冬に季節は移り進んで行った。

真冬になると、零下二十～三十度Cは当たり前で、時々雪も降るが、ほとんど積らない。一度降るとそれが根雪となり、さらさらした乾いた雪で、積っても二、三十センチ位である。温度が下がると風はむしろあまり無く、まれに零下四十度Cともなると、当時はどんなに防寒具をつけていても、三十分以上は戸外に居られない。深々として身体の芯から凍ったようになり、仕方なく出している顔の睫毛が凍って目ばたきがしにくくなり、鼻毛は凍って呼吸が苦しくなる。宿舎から遠く離れた露天便所に行くのが大変で、駈け足で行って用便するが、帰ってくると冷え込みが強いため、なかなか寝つかれなかった。

しかし零下三十度C以下になると、生活のための営内作業の他は戸外労働が休みになるので、その点だけは、疲労回復にもなり、有難かった。

一〇、ダモイとコックリさん

チタ市東北方の山の中で伐採の強制労働に服しながらも、我々は、始めのうちは何かの事情で抑留されているのであって、捕虜になっているとは思っていなかった。収容所のソ連軍将校が、「ワエンナープレンヌイ（軍事捕虜）」という言葉を使うので、次第に捕虜なのか、と思うようになった。しかし彼等からは、「春になればシベリア鉄道で帰国出来るのだ」と言われていた。我々の最大の願望は「ダモイ」であった。シベリアその他のソ連領に連行された何十万人という日本人は、全てこの「ダモイ」のことにのみ執念していたのであり、「ダモイ」の言葉によって生きていたともいえる。

春の三、四月を過ぎても一向にその様子は無く、気候がよくなると共に労働は益々強化されていった。苛々しだした兵隊達の誰からともなく相談がまとまり、収容所内の一角で、夜、「コックリさん」が始まった。私は初めてのことであり、驚いて見守っていたが、要するに、「一過性の孤つき」を作り出して、色々と喋らせるのである。

何かの箱に白い布を敷き、木の枝に新聞

紙を稲妻状に切ったのをつけて御幣の代りに飾り、炊事場から特別に黒パン一個に魚等を受けてお供物にする。坊さんあがりの兵隊が鉢巻をしてその前に座り、呪文を唱えながら、「コックリさん、コックリさん、お願い致します。どうぞ、私達のダモイがいつか、お教え下きい」と繰り返しながら手を合わせて大声を出している。

一生懸命繰り返してやっているうちに、段々合掌した手が上下に動き出し、座っている身体は上下左右に激しく揺れ始め、暫くすると汗びっしょり滴らせながら、遂に失神状態となる。まわりの者が抱き起しながら、「コックリさん、コックリさん、ダモイはいつですか」と聞くのである。すると、その失神した男が、ブツブツ何か言い出すのだが、始めのうちはよく聞き取れない。やがて、「九月、九月」と言うのが聞き取れた。まわりを一杯に取り囲んだ人達は、「九月だ、九月だ」と大騒ぎになった。

そんな希望的な自己暗示でも、その時はそれで皆何とか気を取り直すのであった。しかし当然のことながら、コックリさんは一時の思わせ振りの笑顔を見せただけで、短い夏と一緒に去って行き、やがて十月、更に十一月になると、また冬を越すのか、という落胆に変っていったのであった。

（旧陸軍軍医学校二十三期生）
（横浜市保土ヶ谷区岩間町一ノ四ノ一）